

た。3) 6例に滑膜生検を行い、2例で RA に一致する所見が得られた。4) RA の重複と考えられる例が3例認められたが、5) X線所見で、骨破壊の分布が限局性で、手関節のびらんを主体とし、関節炎が完解した例が2例あった。この2例は、RF は陰性から疑陽性で、滑膜生検像は非特異的慢性滑膜炎の所見であった。

結論：RA の重複と断定できない症例が存在し、PSS 自体により RA 様骨変化が生ずる可能性が考えられた。

#### 4) 難治性 RA に対する免疫抑制剤の使用経験

羽生 忠正・田中 隆明  
星野 賢一 (新潟大学整形外科)

慢性関節リウマチ (RA) の難治例に対して、われわれは、1 mg/Kg 以内の少量のシクロホスファミド (CY) またはメトトレキサート (MTX) の少量パルス療法を施行したので、その成績を報告する。

【対象】CY 使用群は12例 (女11例・男1例) で、投与開始時年齢は43歳から67歳 (平均55歳)、経過観察期間は1年から3年6カ月である。全例プレドニゾン (ス剤) 使用例であった。一方、MTX 少量パルス療法を行ったのは12例 (女9例・男3例) で、開始時年齢は34歳から71歳 (平均 53.4 歳)、経過観察期間は3カ月から3年9カ月である。ス剤使用例は8例であった。

【結果】1) CY 使用群の Lansbury index (LI) は投与開始時平均77%、6カ月58%、12カ月51%、18カ月では49%と徐々に改善を認めた。投与開始時の LI に対して50%以上の LI の改善を著効例、25%以上を有効例、それ以下を不変例と定義すると、最終調査時著効3例、有効7例、不変2例であった。また、開始時蛋白尿を5例に認めたが、4例で消失し、ス剤は9例で減量出来た。副作用による中止例はなかったが、使用中に出血性膀胱炎を疑わせる血尿、白血球減少をそれぞれ1例に認めた (一時減量)。帯状疱疹の併発の2例は、その治療中は休業させた。悪性腫瘍を誘発したと思われる症例は今のところない。2) MTX 使用群の LI は開始時77%、6カ月48%、12カ月後49%と低下を認めた。最終調査時の評価は著効2例、有効7例、不変1例、中止2例であった。副作用を起こしたのは5例で、胃および肝機能障害の2例は中止とした。

以上より、難治例に対する治療成績は両群ともほぼ同等であったが、効果の発現に関しては MTX の方が速効性であり、副作用に関しては CY の方が軽症であっ

た。すでにス剤を使用しているような症例では、MTX の少量パルス療法ばかりでなく、少量の CY の併用療法を考慮してみる価値はあると結論した。

## 第52回膠原病研究会

日時 平成3年11月13日 (水)

午後6時～

場所 有壬記念館

### I. 一般演題

#### 1) 当科で経験したウェゲナー肉芽腫4症例の検討

佐伯 敬子・渡辺 武  
伊藤 聡・上野 光博  
佐藤健比呂・中野 正明  
荒川 正昭 (新潟大学第二内科)

当科で経験致した WG 4例を呈示し、おもに腎病変と予後について、検討した。

症例1：72歳、女性。浸出性中耳炎と顔神経麻痺、上咽頭膨隆出現。腎機能低下、胸部X線異常影あり。ANCA 陽性。PSL と CY で治療を開始したが、敗血症によると思われる DIC を併発し死亡した。

症例2：61歳、女性。壊死性鼻炎、急速進行性腎炎、血痰。ANCA は未検。PSL, CY で治療し、一時腎機能は改善したが、その後低下し、3年後透析に導入した。

症例3：71歳、男性。維持透析中、鼻出血、血痰が出現、鞍鼻もあり、ANCA 陽性。PSL, CY で治療し、一時再燃したが、パルス療法を行い改善した。その後、DIC を併発したり、ANCA が再上昇し、注意深く観察中である。

症例4：64歳、女性。鼻出血、鞍鼻あり。軽度の蛋白尿あり、腎生検で巣状壊死性糸球体腎炎を認めたが、腎機能は正常、ANCA は陰性。CY, PSL で治療し尿所見は改善した。

考案：WG は、腎障害が出現してから診断されることが多いが、それではすでに進行していることも多く、耳鼻科症候が出現した時点で、検尿や ANCA を検索し、早期診断、治療にむすびつけることが必要と思われる。WG の腎病変は巣状壊死性糸球体腎炎が最も多く、ステロイドと免疫抑制薬の使用により、予後は改善されてきたが、一時的に腎機能が回復し、その後 WG の活動性は抑えられていても、慢性腎不全に移行して、透析導入しなければならない症例も多い。腎生検で間質病変、